

〔翻訳〕

## コンヴァンション経済学：定義と成果 [II]

アンドレ オルレアン

須田 文明\* [訳]

André Orléan, (2004)

Trans. Fumiaki Suda

“L'économie des conventions: définition et résultats”, [II]

Ed. A. Orléan, *Analyse économique des conventions*, PUF, pp. 9-48.

### 第II部 コンヴァンション概念に依拠する多様な理論的アプローチ

経済学における伝統的手法の最大の特徴の一つは、社会的環境を「自然化する」ことにある。つまり、経済的世界は自然的所与から構成され、アクターによって曖昧さなく解釈され得、構築される必要がない（「すでにそこにある」と想定されているのだから）。こうして、お互いにコーディネートするために、経済的アクターたちは多くの資源を自由にし得る。これらの所与の状態は、自明であると想定されているので、経済学者たちは、成功裡の市場的コーディネーションの獲得において、これらの所与が演じている正確な役割には必ずしも目を向けない（経済学者の大多数はこうした仮説のいくつかの疑わしい性質を完全に意識しているとしても）。経済学により提起された市場的秩序の最も完成した定式化、すなわち Arrow-Debreu の一般均衡モデルを考慮するならば、この種の三つの仮説がそこで根本的役割を演じている。すなわち、財の分類 nomenclature 仮説および世界の状態の分類仮説、競り人である。これらの仮説のそれぞれに連結しているのが「客観性」形態であり、それぞれ、財および世界の状態、価格形成メカニズムである。批判的視点から、コンヴァンションナリストのアプローチの強さは、客観的所与が膨大な社会的作業の帰結であることを示

すことで、こうした客観的所与を脱構築することにある。どうしたところで、客観的所与が「すでにそこにある」などと想定することはできない。実証的な観点から、こうしたアプローチは、これらの客観的な媒介物の生産において作用している種別的過程が何であるかを曝露することを可能とさせる多様な概念を提示する（品質のコンヴァンション、金融的コンヴァンション、貨幣の正統性）。財の分類仮説を検討することから始めよう。こうした検討は品質のコンヴァンションの概念に至るであろう。

#### 1. 品質のコンヴァンション

財の分類仮説は、均質的で、すべての人に知られている（共有知という意味で）品質を持った  $n$  財のリストの存在を想定していることにある。ミクロ経済学のマニュアルのすべてがこうした仮説に基づいている。きわめてしばしば、こうした仮説はコメントの対象にさえならず、取るに足りないこと、「自然なこと」として与えられているのである。いったんこの仮説が採用されるや、各個人の立場は、曖昧さなく、個人的効用関数（ $n$  財の量に関わる）をつうじて評価される。このように言うことは、事物が完全なる媒介をなしている

\* 農林水産省農林水産政策研究所 〒100-0013 東京都千代田区霞が関 3-1-1

とすることである。というのも商品へのおよびその価格への関係が、各経済アクターの社会的位置を完全に決定するに十分だからである（彼らは別のエージェントとの直接的関係に入る必要もないし、あるいは彼らに関心を向ける必要もない）。

市場経済の取るに足りない中立的な記述などではなく、こうした仮説がその後の理論的發展すべての根本にあることになる。それは、すべてのエージェントにより社会的に承認された使用価値の存在を想定しているので、それは、すでに強く構造化され、予め共通の目印（交渉者たちに対して、効率的にお互いをコーディネートすることを可能とさせる）を与えられた世界を記述する。ワルラス的合意は、（外見上取るに足りない仮説を通じて違法に導入された）その最も深淵なる根をここに見いだす。結局、これらの  $n$  財はすべてのエージェントに課せられており、その品質は共有知の対象をなすので、これらは、市場的コーディネーションを根本的に促進させ、合意獲得を可能とさせる共通言語へと、事実上なるのである。ワルラス的過程がこの共通言語なしには機能し得ないことを完全に証明したのが、情報の非対称性の理論家たち（アカロフ、スペンス、スティグリッツ）である。彼らの推論の論理は、以下のように要約することができる。品質の客観性が完全に認められている場合、取り引き者たちは、他者の行為に配慮する必要は全くない。彼らは価格水準だけを考える。彼らの合理性はパラメーター的である。品質に関する不確実性が導入されるや、こうした布置は疑問視される。すなわち買い手は、財の品質を判断するためには、生産者の意思決定に関心を向けなければならない。こうして、我々は戦略的合理性に至る。合理性の形態へのこうした移動は、事物による媒介が経験する危機の最もはっきりした印である。交換が再開されるためには、品質に関する新しい合意が見いだされなければならない。スペンスの研究は我々にこうした過程の典型的な説明を提供してくれるであろう。

スペンスは労働市場に関心を向け、雇用主が従業員の品質、すなわちその生産性を決定すること

ができない状況を考える。こうした枠組みにおいては、いかにして交換が結ばれることができようか。スペンスによれば、こうした不確実性に対応するためには、雇用主は、従業員の労働生産性（彼らは知らない）と、特定のシグナル（彼らは観察することができる）との間での結合の存在に関して、推測と呼び得るものを形成することになる。この場合スペンスが考えるには、雇用主は生産性（ $\pi$ と表記される）と教育水準（ $y$ と表記される）との間の関係を採用する。このモデルにおいては、こうした推測は事前に観察可能な現実と何の対応もない。というのも生産性は外生的で、固定され、教育水準から独立した所与として想定されるからである。しかしながら、雇用主がこの関係を信じるといふ事実が、彼らをしてある賃金政策（教育水準を妥当な変数として統合する）を採用するように促し、こうして提供される賃金  $W$  は  $y$  の増加関数となる。この賃金規則を知っている従業員は自らの所得を最大化させるように、自らの教育水準を差別的に調節させるであろう。特定の条件下で、教育水準の獲得費用が実際に当該従業員の生産性に依存するとき、雇用主の当初の推測が、事後的に確認されるようなことが起こりえる。換言すれば、雇用主的推測への従業員の合理的反応は、教育水準が、（生産性の低い従業員と生産性の高い従業員の間で実際に選別するような）変数となるようにさせるように導く。我々は、「自己実現的予言」の状態にいる。というのも、こうした当初の推測への雇用主の異口同音の合意が——雇用主の合意が従業員の間で喚起する誘導効果により——この合意が提示する表象が実際に確認される事態をもたらすのである。この場合、その教育水準に基づいて、従業員の生産性を決定することを目標とする異口同音のこうした推測を示すために、「品質のコンヴェンション」について語るることができる。

こうしたコンヴェンションの目的は、労働力の品質の事前の定義における欠如を相殺することである。雇用主が構築するコンヴェンションのオリジナリティは、次の事実由来する。すなわち、

それが一つの変数、教育水準に依拠し、これは基礎的モデルには欠如しており、特徴を持たないことである。というのも、それは根本的な所与全体（選好、資源、生産関数）に由来しないからである。ファンダメンタリスト的な純粋論理においては、教育は賃金にはいかなる効果も持つべきではない。この場合、このシグナルの「価値」はどこからやってくるのか。なぜ雇用主はこれを使用するのか。「教育」シグナルは貴重な特徴を有しているからである。すなわち、それはすべての人にとって観察可能と想定され、その結果、コーディネーションにとって共通の目印として役立つことができる。スペンスのモデルにおいては、労働力の品質とは逆に、この目印は（雇用主と従業員との間でのコーディネーションを支えることをこれに許容する）客観化の作業をなしている。要約すれば、すべての人に知られた品質という仮説を我々が放棄する以上、理論的シーンの前面に再登場するのが、エージェントたちに対してお互いの行為を調和させることを可能とさせる共通の目印の問題である。スペンスにあっては、「教育」シグナルがこの特殊な効力を持っていた。品質の共有知のためにコーディネーションの問題が解消されることを、もはやアプリアリには想定しないことが、分析の中に、経済アクターたちの創意と想像力を再導入する。すなわち、品質の不確実性が生み出す有害効果を中和させ、こうして市場交換を可能とさせることができるコンヴァンションを生み出すために、ファンダメンタルズとの何らの関係もなくても、背景的変数を使用するさいの彼らの能力における彼らの創意と想像力を分析するのである。我々が知っているように、後者の点は自明なところなどない。アカロフ（Akerlof, 1970）が研究した中古車市場の事例では、情報の非対称性が、新しいコンヴァンションによって相殺されないために、あらゆる交換を不可能にさせる。事情が別的那样であるためには、新たな集合的目印が構築されなければならない、スペンスのモデルは我々に、どの様にしてこうした構築がなされるかを示している。こうした構築のコンヴァンション的性格は、

それが、ワルラス的論理と根本的に対立した価格の論理を促すので（というのも、賃金と限界生産性が分岐するようになるから）、いっそう力強く登場するのである。

後者の点は、生産性の観点から同一と想定される二つの集団（すなわち男性と女性）が考慮されるときに登場する。ワルラス的アプローチは躊躇なく、賃金はこれらの二つの集団において同一であるべきであるという事実を導く。スペンスにあっては事情は異なる。というのも、経済的価値（この場合、賃金）と教育への個人的投資とは、雇用主たちが同意するコンヴァンション次第だからである。もしこれらのコンヴァンションが男性についてと、女性についてとで異なっているならば、このことは、この二つの集団にとって異なった状況を導くことができる。例えば、雇用主により女性に要求される教育水準が、男性に要求されるそれよりも顕著に高いと想定してみよう。こうした布置では、いかなる女性も教育を受けることに利益をもたないであろうし、その結果、彼女たちはすべて、おしなべて、男性が受け取る報酬水準の平均に等しい低い報酬を得ることになる。すなわち「外部観察者は、女性たちは、その教育不足のために、特定の男性たちよりも低い賃金を受け取り、このことは彼女らの生産性を低い水準に維持すると、結論づけることができよう」（Spence, p. 373）。こうした解釈は完全に誤りであろう。いかなる女性も、合理的にも、必要とされる学歴を得ることに利益を見いださないようにさせるのは、雇用主による教育に関するアプリアリに過剰な要請なのである。このことから、高い生産性を持った集団の女性は、ワルラス的テーゼに反して、同一の生産性を持つ男性よりも低い報酬を受けることになる。

結論として、情報の非対称性により得られた帰結に照らしてのワルラスモデルの注意深い読解は<sup>15)</sup>、予め定義された事物という、外見上、取るに足りないテーゼにより惑わされるべきではないことを明確に示している。この仮説は、それがアクターすべてが経済についての同一の表象を保有してい

ることを想定しているという点で、根本的である。これこそ商品の客観性の性質なのである。こうした「客観性」は、商品の自然な客観性（モノとして、客観的に記述され得る）と混同されてはならない。大事なことは、市場的客観性の原則にあるのは、すべての人に承認された正統な分類にしたがって、異口同音にカテゴリー化する能力なのである。客観化とは、品質に関して他者が考えていることについて、さらに他者たちが品質について考えている、と彼が考えていることについて、戦略的な相互行為の過程を終わらせることを可能とするものである。スペンスの場合において、アカロフのモデルとは逆に、もしこの相互行為過程が、交換をもたらすことができるとすれば、それは、スペンスがアクターたちに対して共通のカテゴリー（教育、性）——再格付けの作業にとって根本的に役立つことになる——を付与したことによる。教育と性の観点から、労働力の新しい定義に基づいて、市場的コーディネーションを再構築することができるのは、このような共通したカテゴリーの存在のおかげなのである。

結論づける前に、我々が強調しておかなければならないのは、我々の注意を引き、我々に対して、これを典型的なるものとして格付けるように促すのはスペンスのモデルの論理なのであって、その特殊な帰結なのではない。この論理が構築する分析が力強く示しているのは、ワルラス的交換は、アクターたちが、品質の同一の表象についてあらかじめ合意していることを必要とし、社会的労働こそがそこにあり、それは財へと導かれるには、エージェントたちが共通の目印に依拠していることを想定しているのである。スペンスは完全に、自分が証明していることを意識しているかどうか何度も自問することができる。例えば、彼が「教育」シグナルを導入し、それを共有知と想定するとき、いかなる時点でも彼は、我々の観点からは本質的であるこうした特徴については十分に論じていないのである。またスペンスのアプローチの弱さが真に感じられるのは、抽象的モデルを脱却し、市場で作用している真の品質コンヴェンションを規

定しようとするときである。この場合、この分析家に欠如しているのは、アクターたちの共有する共通の目印が、実際には、どのようなものであるかを彼に指摘することができるようなカテゴリーなのである。換言すれば、スペンスのモデルが証明する論理的直感と、妥当な具体的分析の構築との間に膨大なずれが存在する。すなわち、共通世界を構想させてくれる妥当なカテゴリーの真の構築である。偉大さ（価値）の経済が、この分野でかくも成功したとすればそれは、まさにそれがこうした正統なる評価の理解しやすさを提供しているからである。それぞれ Eymard-Duvernay と Salais により書かれた第11章と13章は後者の点を説明している。

きわめてはっきりと、財の客観化というこの作業はいかなる点においても、争点なしの形式的な単純作業とは同一視できない。これを納得してもらうために、土地を商品に変容させるために、資本主義の初期にそれが行使しなければならなかった暴力について考えよう、あるいは、今日、生き物の商品化、遺伝子組換え GMO が提起する問題すべてについて考えてみよう。より一般的に、すべての新たな商品（最も凡庸なものでさえ）の登場の背後には、常に、社会関係（市場的であれ、非市場的であれ）の再定義が演じられ、特定のアクターたちがそれ以前に享受していた権利が強く変質されることになる。正統なるコンヴェンションの役割を強調することは、こうした利害対立を決して否定するものではなく、コンフリクトの形態とその熾烈さ、その解決が、価値（偉大さ）と正統なる表象を動員する際のステークホルダーたちの能力に関連することを指摘することになる。しかしながら、エンクロージャーの有名な例におけるように、決着を付けるのが純粋なる暴力であるようなこともあり得る。既に強調しておいたように、正統なるコンヴェンションのモデルは支配が存在することを否定するものなどではない。スペンスのモデル枠組みにとどまることによってさえ、コンヴェンションの選択が賃金/利潤の分配を根本的に影響することが観察されるし、それが

賃金のヒエラルキーを作り上げることも観察される。本書のEymard-DuvernayとSalaisによる品質のコンヴァンションの分析はこうした分析を確認している。賃金コンヴァンションについては、Eymard-Duvernay (2003)は、それを精緻化することでこの点に立ち返る。すなわち「それぞれのコンヴァンションは財と労働の社会的ヒエラルキーを導入する。採択されたコンヴァンションにしたがって、アクターたちはかなり分類されることになる。したがって我々は純粹コーディネーション・ゲーム——そこではすべての者が同一のことに従うかぎり、アクターたちは、選択されるコンヴァンションについて無差別である——からほど遠いところにいる。社会において作用している力関係が支配的なコンヴァンション、権力保持者を利するようなコンヴァンションを導入すると想定することができる。しかし力関係のみにより統治される社会は不安定である。自らの労働への従業員のコミットメントを獲得することは、彼らにより公正と見なされる規則を発効することを想定している。したがって労働の品質のコンヴァンションが正統であるためには、正義の制約に服する。ある社会がどのように不平等に耐えられるかは失業の理解にとって決定的となるう」。

## 2. 金融的コンヴァンション

今や、世界の状態の分類の仮説を考えてみよう<sup>16)</sup>。Arrow-Debreuモデルにおいてこうした仮説は、将来と、それが包摂する不確実性を特定することを目標としている。このモデルにおいては、この不確実な将来が外生的な事象ないし世界の状態  $m$  のリスト——未来について知らなければならぬすべてのことを網羅的に記述できるとされる——の形態の下で表象されると仮定されている。このリストは、経済アクター全体にとって共有知であると仮定されている。まったくのところ品質についての上述の事例におけるように、共有知の仮説は、こうした分類の客観性がモデル化されるやり方なのであって、それは、この客観性が、それがどんな水準であろうと、各人がこの

記述を知っているという事実に関して、いかなる曖昧さも存在しないことを意味しているというんでそうなのである。この仮説のおかげで偶有的な財 (*ie*)、すなわち事象  $e$  が支配しているとき、財  $i$  は曖昧さなく定義される。こうした形式主義を採用することは、どのような真の過程を通じて、ある経済が未来の正統なる表象を自らに獲得するのか、つまりすべてのエージェントたちによって、彼らの期待にとって共通の参照基準として受け入れられるような未来の表象を獲得するのかを知る、という問題を分析の枠外に放棄するように導く。財の分類仮説にとっても同様、この場合、排除されるのはコーディネートされる活動に必要な共通の目印の生産という問題であり、市場経済についての偽りの理解しやすさしか産出しないというリスクがある。この理論は、どこからそれがやってくるかを我々に説明することなしに、これらの共通の目印の存在を前提する。世界の状態の分類仮説を全くもって非現実的であると判断するためには、不確実性についてのケインズの観念に同意する必要はない。しかしながら、エージェント、とりわけ資本（その実現は長期間にわたり拡張される）の所有者は、不可避免的に、彼らの投資の意思決定をとるためにはこうした目印を必要とする。我々が今や輪郭を描こうとしている理論的分析においてかくも探求されてきたこうした目印をアクターに供給するのは、広義での金融に関連している。実際、この論文の枠組みにおいて、我々は株式市場にしか関心を向けない。主導的考え方は以下のとおりである。すなわち Arrow-Debreuモデルにおいて世界の状態の分類仮説が演じている機能は、資本主義経済の現実において、我々が「金融的コンヴァンション」と呼ぶ事実なのであり、すなわち異口同音に承認された経済的未来についての特定の見方なのである。それは「既にそこにある」ものではない。それは金融的ダイナミズムの暫定的産物である。

しかしながら、その作用を通じて、金融的コンヴァンションが登場し、正統化される過程を描くに至る前に、いったいどこから市場がやってくる

のか、というのが首尾一貫したコンヴェンションナリストが自らに提起するあらかじめの問題である。明らかに、商品の交換を正当化するために主張される理由はここでは指摘され得ない。我々はきわめてヘテロな目的を持った二つの論理と関係している。こうしたテーゼによって、我々は、多くの市場的経済が金融市場を持たないことを観察させることができる。私としては、市場の金融の中に、自らの相互行為を調整するために、資本家が自らに与えることができる種別的組織化様式を見なければならぬという考えを擁護する。株券を現金化することは、株主共同体のまさに政治的選択に由来する。それは採用されるかもしれないし採用されないかもしれない。その上、新たに、この分析によって、株券の流動性が完全に周縁的な現象であるような資本主義が存在することを示すことができる。

こうした選択の性格を理解するためには、資本の特性に固有な矛盾から出発しなければならない。株券は、それが企業の所有権である以上、機械や工場の形で動員される物理的資本——生産過程の展開に応じて、年次を通じて徐々に利潤を生み出す——を表象していることを思い起こそう。こうして株券を保有することは期待される配当金の将来でのフローについての権利をあなたに付与する。それは単に貨幣の約束でしかない。この約束は公的評価の過程に服さないために、その交渉可能性は狭小で脆弱である。こうした不動産化の状況は資本の自信に満ちた戦略に強力な障害をなす。結局それは大量の総額の現金を即座に動員することができることを必要とする。組織された金融市場が創出されたのはまさに、これを容易にするためなのであった。証券取引所は株主の種別的要請（所有権を流動化させること）に応えるために発明された制度的創出物なのである。資本の一般化された競争のために流動性が組織する特殊な方向付けが、強力な利害に突き当たることもあり得るのを理解できる。特定の企業は、同盟の安定性をより尊重した制度的形態の方を愛好することができる（それは例えば、ドイツ資本主義に特徴

的な株式持ち合いのゲームがこれを可能としているように)。こうしていかなる抗いがたい法則も市場の金融の普及と拡張を押し進めることができず、それが明らかである。これは常に景気とその潜在力の政治的評価（「議論の余地のない」と自己宣伝する正統な見方へと様々な分析要素を統合する）から生じる。ここに見られるのは、Lordon (1999)が「参照基準」と呼ぶものの説明であり、それは「経済科学の正統化的担保と、経済政策についての国家の公式的発言、国際機関の処方箋、『専門家』の談話とをごちゃ混ぜにしている」のである。金融的であると同時に一般的なプレスにより伝えられ、確認されるすべてである（p. 179）。こうした観点から、流動性そのものがコンヴェンション、すなわち正当化された合意の一つの様式であると言えよう。

実際のところ、流動性が意味するのは、それぞれ瞬時に、それぞれの株券について、これが売買されるような価格が産出されるということである。こうして、それは金融共同体により正統と承認される社会的評価を構築するのである。金融のオーソドクスな考え方とは逆に、我々は価格が、隠された、自然の、ないし客観的価値、「ファンダメンタルな価値」（その理解しやすさを提供する）の表明であるなどとは考えない。我々のテーゼは、価格は最初の現実であり、説明されるべきものであるということである。金融の目的は、価格が、言われているようなファンダメンタルな価値に合致するようにさせることではない。目的は、ヘテロな世論全体を、すべてに同意される参照基準の価値へと変容させることである。その結果、金融のこうした考え方は、実体経済と金融市場との間の複雑で矛盾に満ちた関係を見るようにさせる。金融市場は生産と交換の関係の単純な拡張などではなく、不動産化が資本の拡張過程に重くのしかからせる制約の回避意欲の表明として登場するのである。証券取引所の効率性の熱心な擁護者にとっては、金融の評価と生産的世界との間の切断は事故として、投機的群衆の非合理性の暫定的産物として考えられるのに対して、我々は、こう

した切断は市場の金融が追求するプロジェクトの定義そのものの中に統合されていると主張したい。金融的流動性はその起源からして、実体経済への侵犯として分析されてきた。それは生産期間と金融の期間との間の決定的断絶を設定する。生産的資本の性格の中に、流動性に対応するものなど何もない。金融的流動性は無から、価格と契約の人工的世界——その目的は資本の即座の動員を可能とすることである——を創出する。

こうした切断がきわめてはっきりとするのは、参照基準の評価の形成をもたらすような世論の論理を分析するに至るときである。それは、そこにおいて各人が多数派世論に対して自らを位置づけようとするような自己言及的過程である。ここからオーソドクスなモデルと異なった特異なる構造が生じる。というのもこの過程は、市場に外生的な客観的現実すなわちファンダメンタルな価値ではなく、内生的変数、この場合、市場の世論を規範として課すからである。公になった新しい情報に直面して、各人は、ファンダメンタル価値へのこの情報の効果を分析するのではなく、いかに市場が反応するであろうかを予測することが重要なのである。もし上昇を期待すれば株を買い、逆の場合は売る。こうした分析は我々に対して、エージェントたちの期待が実体経済にではなく、別の参加者たちの予測に向けられていることを語っている。ここから根本的に模倣的な、特異なる合理性が生じる。というのも、それはその進化（いかに不安定であろうとも）において先を行くように市場を模倣しようとするのである。もし私が、明日に株式相場が上昇すると信じるならば、私の利害は株を買うようにしむけるであろう。たとえ私が、ファンダメンタルズに照らして、この上昇が常軌を逸していると考えたとしても。

こうした自己言及的分析は、積極的で、疑心暗鬼の金融共同体——市場の同意を獲得することができる仮説を決定するためにあらゆる仮説と流言を検討する——を記述している。こうした探求過程が、しばしば散発的な模倣の集中に墮するのは、あれこれの事象が、その際立った特徴のために、

大多数のアクターにより同時に選択されるときである（それは実体経済の情報の内容から独立してなのである）。しかしながら仮説の模倣的なこの探求過程が持続的に安定することができるのは、未来についての解釈が、市場の一般化された同意を受け入れるに至るときである。これらの条件において、各人により正統と見なされる評価モデルが登場し、これを私は「解釈のコンヴァンション」（Orlean, 1999）と呼ぶ。単にマクロ経済的な観点からではなく、品質的な観点——企業の特定のガバナンス構造ないし特定の成長戦略が特権化されることを想定すること——から経済発展に期待される形態を定義しなければならない。「インターネット」コンヴァンションが我々にこうしたコンヴァンションの説明を提供してくれる。それは数年間にわたり株式相場評価を構成していた。自己言及的集団が、客観的参照基準のその欠如を暫定的に克服していたのが、このタイプのコンヴァンションの制定によってなのである。コンヴァンションが受け入れられるや、投機的ダイナミズムは顕著に単純化される。というのも、この場合、他者が行うことを予測するためには、コンヴァンションが予測することを参照するだけで十分なのである。別のコンヴァンションでなくこのコンヴァンションを導く種別的理由の分析は、金融的アクターたちの間に存在する重大なヘテロ性（目的についてであろうと、利害であろうと、信念、権力であろうと）を考慮する必要がある。再び、支配の効果が重大な役割を演じることができる。しかしながらその効果を考慮することは、最も強力なものの利益に合致するように、金融的世論が完全に道具化されるとまでは想定すべきではない。頻繁におこる危機が示しているように何ものかがしつこく抵抗している。我々にこうした還元不可能な自律性のわかりやすさを与えてくれるのが、この自己言及的モデルなのである。この点においてこのモデルが、金融的コンヴァンションの登場についての最も適した理論として課せられるのである。

### 3. 主権貨幣

我々が提示したい最後の事例<sup>17)</sup>は、貨幣の例である<sup>18)</sup>。財や未来についての表象にとってと同様、貨幣についても、我々のアプローチはその外見上の客観性を超えて進むことにあり、それは、その真の性格を考えるためであり、すなわち正統性の作業が自然化させる——客観的で外生的な所与として社会の成員 *sociétaires* の意識に提示する——集合的合意の性格を理論的に考えるためなのである。その上、貨幣分析は、我々によれば、貨幣が市場的秩序において決定的な結合を構成しているが故に、とりわけ重要性を帯びるのである。すなわち「貨幣は、交換関係に形を与え、諸個人の間での媒介の役割を演じる根本的的制度である」(Aglietta, Orléan, 2002a, p. 98)。貨幣は、市場経済が展開することができるために不可欠な条件である。奇妙にも、経済学者の多くがこの問題に着手するのは、このようにしてではない。彼らにとって出発点は、貨幣ではなく、商品および個人的効用、生産関数——様々なアプローチに応じて、彼らはこれらから商品間の交換比率を導出する——なのである。この種のアプローチにもっとも特徴的な例は、労働価値の理論を要求するアプローチにより与えられている。しかし今日、こうした同一の論理構造が、効用価値説の擁護者でも見られる。採用される種別化が何であれ、価値の仮説は貨幣交換の上流で、(それに基づいて、商品の通約可能性が完全に解明されるような)原則を明らかにすることにある。交換の論理が価値法則の中にその完全なる理論的記述を見いだすとすれば、貨幣はいったい何に役立つことができよう。価値関係によりいったん交換関係が決定されたならば、せいぜいのところ交換を促進するだけであるだろう。交換関係が、抽象的社会労働であろうが効用であろうが、「種別の実体」としていることは重要ではなく、我々の関心を引くことについて結果は同一であり、つまり貨幣の「概念的」無効性であり、その役割は、商品流通をより容易にさせる道具の役割へと制限される。Arrow-Debreuモデルが我々にこのことについて新たな説明を提

供してくれる。すなわち、貨幣はそんなにも必要でないために、競り人の権威の下におかれた手形交換所が商品流通を可能とさせることができる。逆に、我々が提案するアプローチは、貨幣交換の以前に提示され、既にそこにある「自然の」通約可能性という考えに対立する。我々によれば、商品にその価格を与えるのは貨幣の異口同音の一致した欲望なのであって、価値と想定されるものなどではない。価格の背後には価値などなく、貨幣があるのである。

価値という観念が我々を、上述で我々が批判してきた考えに類似した思考構造に直面させる。すなわち結局のところ、社会的構築に由来するものを、客観的に提示することである。結局、価値とは何であろうか、またそれが計算することを可能とさせる商品間での量的関係とは何なのであろうか(分業が作り出す双務的依存性の結合の客観化でないとすれば)。その目的においてと同様、その取り引き行為において、市場的秩序がいかに強く自律的な経済主体に課せられているかを知るとい問題は、副次的にしか、周縁的にしか登場しないであろう。換言すれば、市場的主体が共有しているものの問題はそこでは無視されている。というのもこの問題は価値概念のおかげで解決済みと想定されているからである。貨幣仮説の場合は全く事情が異なる。我々にとっては、社会的分業が生み出す客観的依存性だけでは、安定した社会的結合を産出するには不十分である。このことはそれ以上のことを想定し、つまり社会的に承認された評価が、経済アクターたちの孤立した活動に意味と「価値」を与えるのである。客観的相互行為が、すべての秩序を生み出すことができるのは、こうした正統な媒介の作用なのである。これこそ貨幣が演じる根本的役割である。また我々によれば、貨幣は決して道具などではない。貨幣は、集団全体の存在の最も顕著な表現なのであり、市場的関係の社会的に正統な形態であり、これにより各人は経済秩序において自らの道を見いだすのである。貨幣への異口同音の同意こそが安定した社会において市場的集団を構成するのである。こう

した展望において貨幣こそが第一のものである。それこそが、堅固な結合——各人の位置やその義務とその権利を規定している——がお互いの間で結合されるために、社会的成員が共有していなければならないものなのである。貨幣は、我々のアプローチにおいて、社会的全体性の表現なのである。

再び、上述の例に適合的に、コンヴァンションナリスト分析は、いかにこうした結合が具体的に創出されるかを理解するために、——自らの知らないうちにアクターたちを結合させている客観的価値の存在というアドホックな仮説を通じた——社会的結合、この場合、市場的結合の自然化を拒絶することを目標とする。我々にとっては、こうした結合が創出されるのは貨幣を通じてなのである。ここでは、貨幣の構築過程を考慮するために展開される理論的議論を極めて大まかにしか提示できない (Orléan, 2003)。我々の出発点は、市場的切断、すなわち、旧来の形のパーソナルな結合すべてを破壊することで市場社会を打ち立てる孤絶と自律との特別なこうした関係である。切断されたこれらの諸個人はいかなる点で何ものかを共有できるであろうか。かくももっぱら個人の自律性へと向けられた関係に基づいて、いかにして安定した社会秩序が構築され得るのであるか。これこそ市場的社会の最初の謎である。これらの疑問に答えるためには、切断が個人的アクターたちにのしかからせる究極の圧力のなんたるかを考慮しなければならない。中心的な考え方は、市場的アクターがパーソナルな結合なしにお互いに切断されているために、例えば破産の場合におけるように排除される出来事に対抗して、身を守るようになり強力な安全の必要性を感じていることである。こうした安全の必要は、市場的秩序においては、種別的に表明される。すなわち富の追求である。しかし、富とは何であろうか。すべてを獲得することを可能とさせるものである。というのも他者はすべてそれと交換する用意があるからである。換言すれば、他者が富であると考えているものが富なのである。そこから、自己言及的過程——市場の金融について以前に明らかにされた

過程と類似した<sup>19)</sup>——が生じ、そこでは各人は、他者が富であると信じるものを決定しようとしている。我々が証明するのは、特定の事物 (ア prioriに任意の) を、社会的に承認された富として定義するように、この過程が集団の異口同音的同意に至るということである。富の決定に関する世論の異口同音的集中化が生み出す、こうした集合的合意こそが、貨幣を生み出すものである。要約すると貨幣の「実体」は、自己言及的過程の果てに社会的富としてこれを考えるべく貨幣についてなされた合意なのである。

市場的秩序においては貨幣が主権である。すなわち価値の異口同音的に崇拜された表現として、貨幣は、生産者集団に対して、社会へと自らを構成することを可能とさせる社会的力なのである。持続的に自らを維持するために、この主権は、絶えず、貨幣制度の作用が正統なものとして受け入れられることを想定している。換言すれば、貨幣はすべての人の同意を受け入れ続けなければならない。すなわち信頼が永続的に更新されなければならない。貨幣政策につねにのしかかる根本的制約がここにある。こうした信頼を条件付けている多くの要素の中で、根本的な場所を占めている一つの要素がある。すなわち貨幣へのアクセスがいかに規制されるかである。換言すれば、誰が、どのような条件下で貨幣を取得することができるかである。貨幣的正統性が維持されなければならないとすれば、こうした条件が、市場的個人にとって公正で、満足のいくものであるとして現れなければならない。結局、貨幣制度のもとでその公債を発行できる者は、顕著な特権を享受する。すなわち主権者の支持である。主権が偏った力として現れることを回避したいならば、こうした特権は正統化されなければならない。貨幣的危機はこうした機会を示している。つまりそこでは貨幣の主権が疑問視されるのであり、何となれば追求される政策が、偏った人々により判断されているからである。再び以前のコンヴァンションにおけるように、主権貨幣のこのモデルは、社会集団が貨幣へのアクセスにおいて平等ではないという事実を

苦もなく統合する。歴史的にはこうした不平等は永続的な危機の源泉であった。貨幣へのそのアクセスにおいて恩恵を受けない被支配層が新しい貨幣（彼ら自身の利益をよりよく表明する）の起源にあったときがそれである。しかしながら、金融コンヴェンションの場合におけるように、資本もしくはは国家の利益へのその管理を服従させるために、貨幣を道具化する可能性を信じるべきではない。まさに貨幣は集合的信頼を受けなければならないので、貨幣は道具化の、常に存在するこうした意欲に抵抗するのである。

#### 4. 結論

この第二部において提示された理論的アプローチは、同一の論理構造を共有している。それは、その全的根底性において経済的アクターたちとの切斷を検討するために、「すでにそこにある」事物の形での市場的結合の自然化の批判を出発点としている。こうして我々のアプローチは、伝統的アプローチによっては満足できない経済学者のアプローチとして理解され得よう。こうした伝統的アプローチは彼らにとって、根本的な理論的問題を脇に追いやってしまうのである。つまり「市場的結合の性格は何か」、あるいは「切斷されたアクターたちはいかにしてお互いを調整できるか」である。商品や未来の表象、競り人、貨幣を想定することは、もはや価格の動向しか配慮する必要がないために、解決済みとして問題を想定することである。なるほど、これらは重要性を有しているが、しかし明らかに市場的コーディネーションは、価格がその表れの一つでしかないようなより根本的な制度的形態から生じる。市場的關係を最初の観念としているこうした理論枠組みは、コンヴェンシオナリスト的ではない（私が第一部でこうした観念に与えた狭い意味での）。しかしコンヴェンション経済学は、こうした理論枠組みが提起する問題に適した分析手法として現れた。というのもそれは正統性の作用によって、合意とその客観化を考えようとするからである。コンヴェンション経済学に対してなされた様々な批

判とは逆に、一覽した研究は、このアプローチが力関係に対して隘路をなしてはいないことをはっきりと示している。研究されたコンヴェンションすべて（品質、金融、貨幣）について、我々が見てきたのは、ある程度の制約において、正統性が操作され、合意が課せられるということである。ここでは、レギュレーション理論になじみ深い制度化された妥協に近いところにいる (Boyer, 2003)。これらの分析は純粋な支配状況を脇に追いやることを考えることができる。しかし、このことは、分析される状況によるのであり、何らかの理論的コミットメント（それに応じてあれこれの状況が存在しないか、副次的である）によるのではない。正常に機能している社会において、これらの純粋支配状況は希である（それが無いわけではないとしても）と単純に考えることができる。我々が名付けたような「狭義でのコンヴェンシオナリズム」が、ゲーム理論のいくばくかの不十分さに抵抗して、集合的行為のコーディネートされた形態に関心を向けるという事実は、すべてはコーディネーションである！などと意味するものではない。社会的事実におけるコーディネーションに与えられる場所を決定することが、これを受け入れる一般理論に帰ってくるのである。

(後略)

#### 【原注】

(訳者より：本翻訳は本書成立の経緯を記述した部分で、コンヴェンション経済学そのものの内容について重要性を持たないであろうと思われる箇所を省略した。そのために、原注も4)からはじまることとなった)

4) この点の詳細な分析のために、Sugden (1986)の第二章の終わり部分を参照することができる。定義の間でのこうした違いは、それぞれが解明しようとする諸問題における違いへと、より根本的に関連する。ルイスが言語の性質に関心を持つ哲学者であったことを思い起こそう。経済学者の研究への彼の影響を過剰評価すべきでもない。Nicolas Postelは正当にも、「コンヴェンション概念の起源（ルイスにおける）と、経済学におけるその使用との間の断絶」について語っている

- (Postel, 2003, p. 135)。ここで我々の関心を引くのが経済学者の研究であるので、我々はルイスの問題設定をそれ以上に説明しようとはしなかった。
- 5) 「我々は目下のところ、コンヴェンションがどの様に確立するかについての納得のいく理論を有していない」と評価することで彼はこの疑問を棚上げにしている (Chiappori, 第2章)。
  - 6) いかなる曖昧さもない場合、「正統化されたコンヴェンション」もしくは「正統なコンヴェンション」というタームの仰々しさを回避するために、私は単にコンヴェンションについて語ることにしよう。
  - 7) 事実、M. ウェーバーは二つの概念を使用している。すなわち「妥当性」と「正統性」とであり、それぞれが反映し合っている。
  - 8) 第8章において、私がR. ボワイエとともに導いている考察は、正統化されたコンヴェンションに言及することなく、主として、進化ゲーム理論の枠組みに位置づけられる。
  - 9) J1 ゲームは厳密な二つのナッシュ均衡を有していることを指摘しておこう。単一のより良い点が厳密な単一のナッシュ均衡であった場合、何が起ころうか。マーガレット・ギルバート小さな事例について、このことは結果を修正しないことを示している。ギルバートにより提案される推論は、デヴィッドとジョシュアが贈り物をするという状況がナッシュ均衡であるという事実に全く依存しない。
  - 10) このように考察された枠組みは、前述の進化論的枠組みに近い。この枠組みがそれと異なるのは、一方では、二人の個人しか考慮されていないという事実により、他方で、より意義深く、純粋な合理性から由来するものと、そこから由来しないものとの正確な区別が重要であるという事実によってである。換言すれば、合理性の分析はここではよりいっそう厳密に導かれる。
  - 11) 以下のように書く Sugden の記述の下でこの同一の提案を見いだすことを指摘しておこう。すなわち「もし我々が、ゲームの古典的な理論、すなわち非繰り返しの相互行為における完全に合理的な諸個人の理論を出発点として採用するならば、コンヴェンションは理解できない」(Sugden, 1989, p. 90)
  - 12) 結局、アカロフ (1980) は評判効果と並んで、規範を信じるがこれに従わない者が感じる不安感を慮る純粋に主観的な効果を導入する。我々の説明では、我々はこれを考慮に入れていない。
  - 13) リュック・ボルトンスキーとエヴ・シアペロの『資本主義の新たな精神』において主張されているプロジェクトによるシテを加えれば7つある。
  - 14) 私が「最もしばしば」と書くのは、私がすでに指摘しておいたように、この分析は、Young 流のコンヴェンション = 均衡の可能性をアブリオリには拒絶する理由を持たないからである。コンヴェンションの性格について判断を可能とする唯一のものは、検討される状況の種別的研究なのである。

- 15) 私はこのパラブラフの中では、Orléan (2003) において展開された推論のいくつかを再録している。
- 16) ここで提示されている金融的コンヴェンションの分析は、Orléan (1999, 2002a) に基づいており、ここではその要約の最も簡潔な部分しか提示されていない。
- 17) この第二部の導入を読めば、競り人仮説がここでは議論されることをむしろ期待されるかもしれない。我々には貨幣がより重要であると思われた。しかしながら、これらの二つの概念の間での緊密な結合が存在することを指摘しておこう。一般均衡理論において、競り人が貨幣の機能的等価物である、と主張することができる。すなわちこれは、それを通じて諸個人が関係に入り込むものである。それは中央集権的制度である。
- 18) ここでは我々が Aglietta et Orléan (2002a, 2002b) で展開した分析の主要部分を再録しよう。
- 19) あらゆるモノにおいて自己言及性や模倣を見がちな著者の単一狂の兆候を見るべきではない。こうした類似性は、貨幣の場合においても市場の金融の場合においてと同様、同一の現実、すなわち流動性を動員することが重要であるという事実を根拠にしている (Aglietta et Orléan, 2002a)。

## 【参考文献】

- Aglietta Michel et Orléan André, (2002a) *La monnaie entre violence et confiance*, Paris, Odile Jacob.
- Aglietta Michel et Orléan André, (2002b) "Réflexion sur la nature de la monnaie" *Lettre de la Régulation*, n° 41. (Repris dans *Problèmes économiques*, n° 2790, 1er janvier 2003).
- Akerlof George A., (1970) "The Market for 'Lemons': Quality Uncertainty and the Market Mechanism", *Quarterly Journal of Economics*, vol. 84, n° 3 488-500.
- Akerlof George A., (1980) "A Theory of Social Custom, of Which Unemployment May Be One Consequence", *Quarterly Journal of Economics*, vol. 94, n° 2, juin 749-75.
- Batifoulier Philippe (éd.), (2001) *Théorie des conventions*, Paris, Economica, 2001.
- Bessy Christian et Favereau Olivier, (2003) "Institutions et économie des conventions", *Cahiers d'Économie Politique*, n° 44, L'Harmattan, 2003.
- Biencourt Olivier ; Chaserant, Camille et Rébérioux Antoine, (2001) "Véconomie des conventions : l'affirmation d'un programme de recherche" in Batifoulier Philippe (éd.), *Théorie des conventions*, Paris, Economica, chapitre VI, 193-218. (パティフリエ編著『コンヴェンション理論の射程』、昭和堂)
- Boltanski Luc et Thévenot Laurent, (1991) *De la justification. Les économies de la grandeur*, Paris, Gallimard, NRF essais. (ボルトンスキー、テヴノー『正

- 当化の理論』三浦訳、新曜社)
- Boltanski Luc et Chiapello Eve, (1999) *Le nouvel esprit du capitalisme*, Paris, Gallimard, (ボルトンスキー、シアベロ『資本主義の新たな精神』、三浦、海老塚、須田他訳、ナカニシヤ出版)
- Boyer Robert, (2003) "Les institutions dans la théorie de la régulation", *Cahiers d'Économie Politique*, n° 44, L'Harmattan.
- Chiappori ; P :A.,(2004) "Anticipation rationnelles et conventions", in Orlean, A.(ed) *Analyse Economique des Conventions*, PUF, pp. 101-117.
- Douglas Mary, (1989) *Ainsi pensent les institutions*, Usher.
- Dupuy Jean-Pierre, (1989) "Convention et *Common knowledge*", *Revue Économique*, vol. 40, 11° 2, 361-400.
- Dupuy Jean-Pierre et Pierre Livet (éds.), (1997) *Les limites de la rationalité*, tome 1 : « Rationalité, éthique et cognition », Paris, La Découverte, coll. « Recherches ».
- Elster Jon, (1989) *The cernent of society*, Cambridge et New York, Cambridge University Press.
- Eymard-Duvemay, François, (1989) "Conventions de qualité et formes de coordinatio", *Revue Économique*, vol. 40, no. 2, 329-359.
- Eymard-Duvemay, François, (2003) "Du marché généralisé à la pluralité des conventions constitutives", *Cahiers Lillois d'Économie et de Sociologie*, n° 41-42.
- Gilbert Margaret, (2003) *Marcher ensemble. Essais sur les fondements des phénomènes collectifs*, Paris, Presses Universitaires de France.
- Leibenstein, Harvey, (1982) "The Prisoners' Dilemma in the Invisible hand: An Anatysis of Intrafirm Productivity", *American Economic Review*, 72(2), 92-7.
- Lewis David, (1969) *Convention: A Philosophical Study*, Cambridge (USA), Harvard University Press.
- Lordon, Frédéric, (1999) "Croyances économiques et pouvoir symbolique", *L'Année de la Régulation*, vol. 3, 169-210.
- Lordon, Frédéric, (2000) "La légitimité au regard du fait monétaire", *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, 55<sup>e</sup> année, n° 6, 1349-1359.
- North, Douglass C.(1999) *Institutions, Institutional Change and Economie Performance*, Cambridge et New York, Cambridge University Press.
- Orléan, André,(1997) "Jeux évolutionnistes et normes sociales", *Économie Appliquée*, tome L, n° 3, 177-198.
- Orléan, André (1999) *Le pouvoir de la. finance*, Paris, Odile Jacob.
- Orléan, André, (2002a) "Pour une nouvelle approche des interactions financières : l' économie des conventions face à la sociologie économique » in Huault Isabelle (éd.), *La constructions, ociale de l'entreprise: autour des travaux de Mark Granovetter*, Editions ems.
- Orléan, André, (2002b) "Le tournant cognitif en Économie", *Revue d'Économie. Politique*, vol. 112, n° 5, 717-738.
- Orléan, André, (2202c) "L'économie des conventions est-elle une branche de la sociologie économique?", communication au Colloque « Histoire et méthodologie de la sociologie économique », Maison des Sciences Économiques, 6 décembre.
- Orléan, André, (2003) "Réflexion sur les fondements institutionnels de l' objectivité marchande", *Cahiers d'Économie Politique*, n° 44, L'Harmattan.
- Postel, Nicolas, (2003) *Les règles dans la pensée économique contemporaine*, Paris, CNRS Éditions.
- Reynaud, Bénédicte (éd.) (1997), *Les limites de la rationalité*, tome 2 : « Les figures du collectif », Paris, La Découverte.
- Reynaud, Bénédicte, (2002) *Operating Rules in Organizations. Macroeconomic and Microeconomic Analyses*, Palgrave Macmillan.
- Spence, Michael, (1973) "Job Market Signaling", *Quarterly Journal of Economies*, vol. 87, n° 3, 355-374.
- Stiglitz, Joseph, (2002) *La grande illusion*, Paris, Fayard.
- Sugden, Robert, (1986) *The Economies of Rights, Cooperation and Welfare*, Oxford et New York, Basil Blackwell.
- Sugden, Robert, "Spontaneous Order", *Journal of Economie Perspectives*, vol. 3, n° 4, automne 1989, 83-97.
- Thévenot, Laurent, (1989) "Équilibre et rationalité dans un univers complexe", *Revue Économique*, numéro special « L'économie des conventions », vol. 40, n° 2, 147-197.
- Weber, Max, (1995a) *Economie et société/ 1 - Les catégories de la sociologie*, Paris, Plon.
- Weber, Max, (1995b) *Economie et société/ 2 - L'organisation 'et les puissances de la société dans leur rapport avec l'économie*, Paris, Plon.
- Young, Peyton H., (1996) "The Economies of Convention", *Journal of Economie Perspectives*, vol. 10, n° 2, 105-1:22.